

過去の残影

——咸寧の五七幹部学校について——

萩野脩二

はじめに

文革は、正式にはプロレタリア文化大革命と云い¹⁾、ここでは文革と略称するが、今から見れば、壮大なるバカなことのように見える。この驚くべき過去は、1人2人がしたバカなことではなく、何千万、何億もの人間が同時にしたバカなことであることに特徴がある。世界でも古今でも類を見ないがゆえに、壮大なと言うのである。しかし、どんなに今から見てバカなことであっても、その当時においては、やる方も真剣であったし、又、やられる方も真剣であった。それなのにバカなことというのは、死者や障害者を、その真剣さゆえに出したからである。

人は、過去の一こまを振り返ると、バカなことをしたと思うことがある。過去というものが一こま一こまの堆積であれば、人はバカなことの累積で生きているのかもしれない。バカなこと、滑稽なことは、しかし、真剣であることから生じている。文革中の、赤い宝物と称された『毛主席語録』を振りかざして、絶叫する紅衛兵を見るが良い。批判大会で首から罪状を書いた鉄板をぶら下げられている指導者や作家の写真を見るが良い。私には滑稽でバカげたことに見えるが、その時彼らは、実に真剣に対処していたのである。何に真剣に対処していたかというならば、彼らは勿論“革命”に対処していたのである。これからの良き社会を作るために、旧悪を排して、新しい社会と自己の再生とを信じての真剣さであった。このことを忘

れては、文革のもう1つの面を見失うことになるろう。

すなわち、文革は、3大差別の解消を実行するための1つの試みであったのである。農業と工業、都市と農村、頭脳労働と肉体労働のこの3つの差異を如何に少なくし、無くすかを目指す、壮大な実験のために、人々は“革命”に投じたのであった。

3大差別を解消するために、すなわち差別のない社会にこの世を改造するために、知識人は真っ先に肉体労働を体験し、労働者・農民の世界観を身につけようとした。すなわち、上級幹部が基層に入り直接生産現場で労働し、自分の工作态度や思想をチェックすること。これが「下放」ということであった²⁾。

とはいえ、その熱気が冷めた時、そこに見る自らの過去は、あまりにも矮小で、貧弱で哀切なものであった。私がバカなことというだけでなく、当事者たちもバカなことと感じざるを得なかったが、自らの過去をそう単純にバカなこととして打ち消すことは出来ないものであろう。

今、張光年の『江漢日記』³⁾から、一部を引用してみよう。1988年10月15日の日記である。

☆多分、堤の周りに雑草が一杯生えてしまったのが原因であろうが、私には向陽堤の高さが低くなってしまったように感じた。当時の勇壮な景観とはまるで違った。堤に登って遥かに湖面を望み見て、私はびっくりした。我々が当時初めて咸寧に着いた時に見た、あの鏡のような水をたたえた湖ではない。しおれた蓮や葦の茂みが雑多に生えているのだ。湖を囲んで田んぼを作ったが、そこに縦横に走る田のあぜ道さえ、また、拙い手つき鈍な足つきで開墾した張り巡らされた碁盤のような水田も、麦畑も、みんな跡形もなくなっていたのだ。今、見えるのは、目一杯の干からびた湖と荒れた草地であり、雑色の羊と牛の群れ群れである。向陽湖はなくなってしまったのだ。稲の田んぼも、麦の畑も、野菜畑もなくなった。あの時、我々第5中隊の陳白塵や侯

金鏡同志がアヒルを放した長い溝の浅い水溜りは、彼らと日差しを除け、雨を避けた柳の木陰と共に、なくなったのだ⁴⁾。

ここには、あれだけのことをした五七幹部学校の喪失に対する驚きの目がある。ここには、過去に注いだ、それは自らの生命を込めて注いだ、人の営為が何の価値もなく捨て去られたという無念さが滲み出ている。

この引用の後、張光年は五七幹部学校が閉鎖した後、あのような大勢の労働力がなくなったので、今や間に合わせの牧場になってしまったことを述べ、滄海変じて桑田になると言うが、荒湖変じて牧場になった、と時の移り変わりの無情さに慨嘆している。

人は過去を振り返り、過去の人生を確認したがるものだ。この文章にある驚きは、過去の変えがたい人生が、なんとバカらしく、矮小で、貧しいものであったかと認めざるをえない無念さに裏打ちされている。過去を冷静に見れば、この「向陽湖」や湖を巡る堤だとして、決して光り輝くものではなかったはずだ。しかし、人はそこに自らのある思いを込めて新たな1ページを開こうとしたのだ。それゆえに、過去すなわち、その時は、大きく、厳然と動かしがたいものとして自らに対処していたのであろう。

ある種の夢心地から目覚めた時、そこに見る実態の貧相な哀切な姿を、現在の生から無視し、軽蔑し、排除することが可能であるのか、私にはわからない。但し、多くの作家たちは過去を時間の距離に比例して懐かしみ、着色して思い出す。文字というものが必然的に、過去を良きものとするからであろうか。貧相な哀切な姿がそこにあれば、バカげた過去に嫌悪を示すかもしれないが、普通は人は、一層良き残影として過去をいとおしむに違いない。「彼らと日差しを除け、雨を避けた柳の木陰」が当時如何に辛い、艱難の生活によるものであったかに関係なく、すでに残影として臉に見えるそれは、浄化されているような気がする。

私には過去が回想され、いとおしむ作家の気持ちも嬉しく読むが、過去の実態を幾らかでも明確にすることにも、関心がある。文化大革命の下の

知識人たちの生活について、幾つかの回想録が出ている⁵⁾が、過去をバカなこととしないスタンスを求めたい。

—

ここで、上述の引用につき、幾つかの説明をしておこう。

まず、張光年であるが、1913年に生まれ、2002年1月28日に死んだ。湖北省光化（現在の老河口市）の人。筆名、光未然。詩人で、「黄河大合唱」の詩が特に有名。この400余行の詩を彼は1939年3月11日に延安で朗読した。それを聞いた冼星海が6日間窑洞に籠もって曲をつけ、全国に広まったというエピソードがある。『文芸報』主編、中国作家協会副主席、党組書記などを歴任。詩集『五月的鮮花』や論文集『戲劇的現實主義問題』などがある⁶⁾。

張光年は、1969年から1972年まで、文化部が設置した「咸寧五七幹部学校」に下放した。彼は文革が始まると、「文芸の黒い線の仲間」として、江青や康生などが作った「中央專案組」の直接管理に置かれ、北京で「隔離審査」を2年間受けた後、何度か申請書を出して、やっと咸寧の幹部学校に下放することが許可された⁷⁾。

「五七幹部学校」についての説明は、ごく簡単にするが⁸⁾、1966年5月7日に毛沢東が林彪に送った指示に基づいている。毛沢東は「軍隊は大きな学校となるべきであり、政治・軍事・文化を学び、生産活動を行え」と主張した。そして、「労働者・農民・学生・機関幹部も同様の学習をしなければならない」と言った。この指示は5月15日に全国に伝達され、8月1日の『人民日報』の「社説」が「各業種もみな工と農、文と武を實踐する革命の大学校となれ」と号令をかけた。これ以後、各地に「五七工場」「五七農場」「五七大学」などが設置された。

「五七幹部学校」は全国に1,000か所以上作られ、中央から県レベルまでの幹部が送り込まれた。最初に出来たのは、黒龍江省の柳河五七幹部学

校であり、一番大きなものは、中央弁公庁系統が設けた江西省にあったもので、ここに登場する張光年が下放した湖北省咸寧の向陽湖文化部五七幹部学校は、規模として2番目に属する。文化部には、江青が力を入れた天津静海团泊窪五七幹部学校もある。他に有名なものとして、楊絳やそのご主人である錢鍾書が下放した中国科学院哲学社会科学部五七幹部学校が、河南省の羅山にある⁹⁾。また、当時造反派であった戴厚英が批判対象の詩人・聞捷を愛し、結婚した¹⁰⁾ 中国作家協会上海分会の奉賢上海文化五七幹部学校などがある¹¹⁾。ここは巴金もいた所であった¹²⁾。

五七幹部学校を時期的に分けると、1968年から1970年までの草創期、1971年から1973年までの落潮期、そして1974年から1976年までの晩期に分けられるという。

草創期：穀物、油、肉、卵の「四自給」のスローガンに見られるように、生活、生存が最大の目標であった。塩やアルカリの荒れ果てた土地、平原丘陵の土地に素手で住む家を建てることから始めた。田植えや種まき、日干しレンガや家造り、囲いを作って豚を飼ったり、開墾して野菜を植えたりするなど、生存のために奮闘した。原始的に人が犁などを引っ張ったり、天秤棒を担ぐ労働で苦勞した。おまけに、「昼間労働、夜批判」という階級闘争の過酷さがあった。

落潮期：林彪が墜落死した1971年の「9・13事件」の後、目に見えて規律が弛緩した。1972年から周恩来首相が中央の日常工作をつかさどり、「幹部を解放して、幹部を使用する」ようになったので、多くが幹部学校を離れた。

晩期：1974年の初め、江青らは「右傾翻案風に反撃する」運動を開始した。そして「五七幹部学校」を「新生事物」だと鼓吹した。江青は「老幹部の75%は民主派だ。民主派が走資派になるのは、客観的な規律だ」と言い、「四人組」が逮捕されるまで五七幹部学校を続けた¹³⁾。

以上が、五七幹部学校の大略である。

この咸寧の五七幹部学校について、張光年は次のように書いている。

☆中国作家協会が咸寧の向陽湖に分配した人たちは、第5中隊に編入された。人民文学出版社の人が第14中隊として隣におり¹⁴⁾、それぞれ1つの小さな丘に居を構えた。日の出（それ以前から）に起き、日の入り（それ以後まで）に憩う。建物の建築、野菜を植えること、堤を築くこと（湖の周りに田んぼを作ること）、並びに膝まで浸かって田植えを学ぶこと、草を抜くことなどの労働に従事した。実は、日入りて憩うべき夜が一層緊張した。というのも各班や小隊ではしょっちゅう夜を利用して「学習」したり、「走資派」を批判したり、「516」分子¹⁵⁾を批判する会を開いたからである¹⁶⁾。

下放した人々は軍隊組織に学んで、中隊とか小隊などに編入された。咸寧には家族係累を合わせて約5,800人がいたという。作家協会からは、張光年、侯金鏡、謝冰心、臧克家、張天翼、巖文井、李季、郭小川、馮牧、葛洛などの有名作家を含めて118人、家族を入れて約150名がここに下放した。葛洛、甘棠恵、夏更起、劉劍青など第1陣が1969年4月11日に行き、11月30日には陳白塵たち第2陣が下放した。

1972年12月に咸寧五七幹部学校が事実上取り止めになり¹⁷⁾、そのあとは咸寧地区がこの場所を向陽湖農場とし、1975年、そこは国営になった。1980年には咸寧地区乳牛良種場となった。当時の第5中隊や第14中隊が住んだ建物は、1988年張光年が再び行った時には牛小屋になっていたという¹⁸⁾。

牛小屋と言っても、ここでは本当の乳牛の小屋であるが、文革時期には、「牛小屋」と言えば、「牛鬼蛇神」と言われた者が入れられた私的監獄を指して言った。1949年以来17年間中国の文芸を指導してきた者たちは、徹底したプロレタリア路線をとらなかつたという批判のもとで、「黒い線」を推し進めたと言われたが、そういう人たちを「文芸の黒い線の仲間」と言った。殆どの文芸工作者が「走資派」（資本主義、ブルジョア路線を歩む者たち）

として批判の対象になった。そういう人たちを、労働者宣伝組などの指導の下、「革命大衆」と言われた他の文芸関係の知識人が批判し、革命を進めていることにしたのである¹⁹⁾。

一般の下放した文芸工作者たちは、毛沢東の呼びかけに応え、本当に一生を貧農・下層中農（或いは肉体労働者）に学び、農民となる覚悟で咸寧にやって来た。北京を出る時には、家も家財も売り払って来た者が多い。彼らは自分たちの思想改革は肉体労働によって改善されると深く信じたのである²⁰⁾。だから、「革命大衆」と言われたのである。勿論、この覚悟は、張光年のように「文芸の黒い線の仲間」の人間でも同じであったから、殆どすべての文芸関係者はこの咸寧に、農民となる覚悟を以ってやって来たのであった。

だが、その実態はどうであったかと言えば、楊絳や陳白塵がその回想記で書いているように、貧農・下層中農に学び交流するどころか、却って乖離し分断するものであった。

☆このような不毛の地にわれわれ幹部学校は「桃源郷」を作り出そうとしていた。——別の言い方をすれば、私たち文化人を今からここに定住させ、徹底的に改造して額に汗する労働者とし、もとの文化関係の仕事には永久にもどさないということであった。これはまさに「文化」の「命」を「革（と）」り除くということである。この解釈には根拠があるように思われる。その1は下放の動員の時に、老人子供を連れて一家全員で行くように特に強調されたことだ。その2は、この農民がわれわれを題材に作った順口溜（民間の口語詩）だった。その詞にいわく、/「五七宝ちゃん、五七宝ちゃん、/着物はボロボロ、食事は上等、腕にでっかい腕時計、/五七宝ちゃん、五七宝ちゃん、/たくさん 播いて、とり入れ少し、/北京には帰りたくても帰れない」（略）

「たくさん播いて、とり入れ少し」についていえば、これも実情だ

った。その原因は簡単である。耕作ができない。または播時を知らないせいである。お百姓たちは次の文句で私たちのことをたくみにいい表している。/「大雨で大働き、/小雨で小働き、/晴天は働かない」/「大雨で大働き」というのは、私たちは皆「一に苦を恐れず、二に死を恐れない」革命者であったから、雨がたくさん降れば降るほどはりきって働いたのだ。それでこそ革命精神を表現できるというわけだ。しかし、ある日麦刈りの最中に雨が降りだし、みんなは、「中止だ、刈るわけにはいかない」と言ったのだが、われわれの中隊長は類まれなる雄々しさで叫んだ。「お天道様とあくまでも張り合うんだ！」。麦はもちろん全部刈りおえた。しかしお天道様は、この努力をかってくれなかった。三日間雨が降りっ放しで、刈りとった麦はすっかり腐ってしまったのだ。「小雨で小働き」は注釈はいらないだろう。「晴天は働かない」というのはまたなぜか。答は「会議」である。革命は規律を重んじなければならぬ。中隊本部ですでに決めた計画に従い、会議を開くと決めた日には必ず会議は開かねばならぬ！これがすなわち「たくさん播いて、とりいれ少し」のゆえんである²¹⁾。

長い引用になったが、ここから、知識人の五七幹部学校での実情が良くわかるであろう。知識人と下層の農民とには抜きがたい格差があって、その中間に存在した造反派が如何にバカげた指導をしたかが良くわかる²²⁾。農民の「あんたたちの幹部学校は口さえ開きゃ貧農下層中農に学ぶというけど、あんたたちときたらおれたちの意見をきかないんだ。作物を植えるのだって、おれたちのいうことを信じない。大雨に大働きで……」²³⁾という言葉が示すように理念と実態との乖離ははなはだしかった。しかもこの実態を目の当たりにした造反派が事態の修正を生かそうとしない所に問題があろう。革命にせよ、その造反者にせよ、物事を推し進める時には、往々にしてよい発想とひらめきがあるものだ。ことを推し進めることの快樂がここにある。だが、ここに報告されているように、五七幹部学校にはどの

面からも、そういう生き活きた柔軟性がなく、上意下達の硬直した技巧と発想だけが目に付く。

文革の知識人への側面は大きく言って2つあった。1つは、「牛鬼蛇神」と言われた文筆に携わった者への迫害である。もう1つは、「貧農・下層中農」に学んで一生を農民（或いは肉体労働者）として暮らすということである。

私は過去に、第1に挙げた迫害の面から、「文学者の死」という論文を書いたことがある。その中で、侯金鏡が幹部学校で如何に悲惨な目にあっただかを書いた²⁴。「現行反革命」とされた侯金鏡は懲罰的な重労働をさせられたが、彼について陳白塵は次のように書いている。

☆8月8日 日曜

侯金鏡同志は今朝突然亡くなった。悲しみこの上ないことだ！ 昨日、彼は野菜班にしたがって田んぼ開拓の大労働にやって来た。中隊に戻ってから、Sが彼に野菜畑への水汲みを無理にやらせた。連続して10回も天秤棒で水を汲んだ。夜10時、心臓病が急に起こり、救急が間に合わず、明け方哀れにも急逝した。Sというこの「積極分子」は、間接的な殺人犯だ！ 侯金鏡は有名な病気持ちだ。たとえ配慮をしても、このように人を痛みつけることが出来たであろうか。

侯金鏡がアヒル番の時、しょっちゅう病気を起こしていたので、危険を感じて私は小隊長に彼を配置換えすることを提案した。彼の身体のことを配慮したのだ。凶らずも、侯金鏡は野菜班に戻り、私のもとの持ち場になった。おまけに労働量が増えた。これは私の初心と全く相反することであった。

「私は伯仁を殺しはしなかったが、伯仁は私によって死んだのだ！」²⁵ 私はいつの間にか共犯者となっていたのだ。こう思うと悲痛の中に無限の悔恨が加わる²⁶！

この文章の特徴は「S」という人物が出てくることである。ここに出て

くる「S」というのが誰を指すのか不明であるが、作協の造反派で小隊長であった。侯金鏡や陳白塵などを管理する者である。陳白塵の日記には、「S」は1970年2月23日以来、16回も出てくるが、「S」は陳白塵にも侯金鏡にやらせたような水汲みや下肥の桶を何度も担がせている。陳もやはり肥桶を何度も野菜畑に担いで行ったのである。造反派としては、侯や陳のような「牛鬼蛇神」に肉体労働で酷使することが“革命”の唯一の手段になったのであろう。

但し、侯金鏡が如何に苦しくても、またここで陳白塵を加えても良いが、自分の体調の異変を感じても、肉体労働を回避しなかったのには、上述の第2の側面、肉体労働こそが唯一の思想改造の道、すなわち再生の道であると固く信じていたからである。このことを強調しておこう。今となれば、自らの死に代替出来るわけではないバカバカしい行為に違いないが、過去をバカバカしいと評価する不遜さを私は持っていない。

二

侯金鏡は、張光年が言う「アヒル」の飼育にも携わったが、のちに野菜畑の管理に移り、その過労で死んだ。アヒルの飼育に力を入れていたのは、そしてアヒルに愛情を注いだのは、陳白塵であった。彼の『雲夢沢の思い出——文革下の中国知識人』にはそのことが詳しく書かれている²⁷⁾。

その陳白塵には、また『牛棚日記 1966-1972』という回想記がある。これは、生活・読書・新知三聯書店から1995年5月に出版された233頁の本である。本人の「前言」（1994年1月28日于南京）があり、娘の陳虹の「后記」（1994年12月10日）がある。

この『牛棚日記 1966-1972』には延べ376人の人名が出てくる。労働者宣伝隊の者や軍宣伝隊の者、「專案組」（特捜部）の者まで、時には「××」とか「王某」、あるいは「S」や「Y」などイニシャルで出てくる。他には陳白塵の身内の者、奥さんの「金玲」は33回も出てくる。一番多く出て

くるのは、49回の張光年²⁸⁾と張天翼であり、次が劉白羽の44回である。この4人（陳白塵を入れて）は同じく「專案組」に早くから取調べを受けていた者であり、それぞれ、『人民文学』や『文芸報』の主編や副主編を勤めていた仲間である。いわゆる「文芸の黒い線の仲間」なのであった。

より正確に言えば、1966年8月8日に、プロレタリア文化大革命の決定が公布され、作協に造反派が出来た。彼らが造反した対象は、作協の党組と書記処の指導者たちであった。そこで作協の「牛鬼蛇神」となったのは、劉白羽、嚴文井、張光年、李季、馮牧、侯金鏡、張天翼、張僖、葛洛、韓北屏、陳黙に、南京から連れて来られた陳白塵、広州から引き戻された黄秋耘の13名であった。後に劉劍青と塗光群が加わったので15名になった²⁹⁾。彼らは「牛棚」（牛小屋）にいれられたばかりではなく「抄家」（家宅捜査）にあい、肉体労働を強いられ³⁰⁾、行動の自由は勿論なかった。

彼らが、咸寧の五七幹部学校に下放しても、やはり造反派の監督を受けた。というより一層厳しくなったと言っても良いかもしれない。したがって、陳白塵の日記も、彼が咸寧の五七幹部学校に下放した1969年11月30日からは、俄然造反派の人間が出てくる回数が多くなる。以下の表は、陳白塵の五七幹部学校に下放してから4回以上出てくる人物の表である。

「表」：陳白塵の『牛棚日記』1969年11月30日以降に出てくる人物の回数。

杜麦青：6回	馮牧：5回	侯金鏡：5回	李季：9回
嚴文井：4回	張光年：8回	張天翼：5回	
老趙：9回	小李：4回	××：23回	×：16回
L：4回	R：5回	S：16回	W：9回
			Y：11回
			Z：5回
金玲：13回			

「表」の上段は、所謂「文芸の黒い線の仲間」である。杜麦青は『人民文学』の副主任であった。下段の「金玲」は南京にいる陳白塵の奥さんであるから、出てくる回数が多いのは当然としても、それよりも多いのが中段の「××」の23回であり、「×」と「S」の16回である。彼らの名前は

イニシャルなどによって、すでに我々にはわからなくなっているが、そこに込めた陳白塵の気持ちは理解できよう。

☆まるまる7年の間、父は中国作家協会の「牛小屋」に半ば幽閉されながら、毎夜人が寝静まった深夜に、こっそりと起き上がって、ただ父だけが見てわかる符号と各種の「縮写」で、あの「偉大な」時代を記録したのだ。私は父に聞いたことがある。「こんな大きな危険を冒してこんな日記をつけるなんて、一体どんなつもりだったの？」父は冗談のように次のように答えた、「ただ、一旦いつの日か誰かがお前たちの“犬の老人”がどんな人かを尋ねた時に、これを持ち出してありのままに述べるためにだよ」と。これは父のユーモアだろう。が、また、憤りでもあろう。——父の字や行間から確かに1つの忠実な心を、誠実な心を、そして、ドクドクと血の流れる心を見ることが出来るではないか^{3D}！

これは、娘の陳虹の「后記」の言葉である。人でなしということから「犬の老人」と罵られた陳白塵の確かな憤懣が、彼の日記にも現れている。彼には、「ありのままに」語りたいという強い欲求があった。彼自身が知る真実をいつか世の人が知ってくれるという強い欲求である。それは自分がこの時誠実に忠実に生きたという強い信念があるからであろう。自らの生への強い矜持を感ずることが出来る。

☆5月21日 金曜

丁字河の野菜畑に行っかぼちゃのために下肥を入れる。Sは、私が中隊に戻って下肥を担いで来なければダメだと言い張る。午前3回担いだ。往復5、6里ある。もう精根尽き果ててしまった。昼少し休んで、また一担ぎした。しかし、野菜畑からもう少しのところ、少しも動けなくなってしまった。胡海珠がこの様子を見て、駆けつけて助けてくれたが、しかし、××はまだ許さないで、もっと続けろと言う。中隊に戻ってみると、肥溜めはもう掬い尽くされて、僅かに2

桶半しか残っていなかった。——糞が私を救ったのだ！「労働懲罰論」は確かに存在するのだ³²⁾。

ここには「S」や「××」という者の、非人間的な行為が描かれている。彼らは人を改革しようとしたのかもしれないが、実体としては、あくどい残虐な行為をしたことにしかならない。人の生命への配慮と信頼がないからであろう。それ故、彼らは本名が書き残されていないのだともいえよう。

むしろここで注目されるのは、胡海珠³³⁾のように、他人を助けることが出来る人物がいることだ。ホンの少しでも良い、こういう好意がどんなに人を救うものか、想像できる。そこには人間の本来持つ生の肯定面・善意が示されるからであろう。生の肯定を感じずることは、どんなに苦しく困難な時にあっても、人を浄化し、力を喚起する。

奇しくも、ここに出てきた胡海珠は、侯金鏡の妻であった。

おわりに

過去を思い出したくないというのは、胡海珠もそうであった。特に1971年の8月7日から8日にかけてのことは思い出したくないと言う。それが、ご主人の侯金鏡が死んだ日であれば、十分理解できる。だが、いつかは胡海珠もそうであるように、記録し残しておかねばと思うようである。そこには懐かしさだけではない、事実を残しておきたいとする、或いは真実を残しておきたいとする心の叫びがあるような気がする。この文章に拠れば、侯金鏡が言った「林彪はピエロみたいだ」という言葉を馮牧が漏らしてしまったことや、1971年に今まで抑えられていた給料の1,200元をそっくり党費として差し出したことなどがわかるが、次のような事実も伝える。

☆我想起丁力同志曾經告訴我，說金鏡同志去世那天（8月8日）早晨，一位“革命群眾”像是報喜似的，對正在湖里勞動的同志幸災樂禍地高声喊道：“侯金鏡早上‘格兒屁’了！”³⁴⁾。

侯金鏡は「現行反革命分子」（反革命現行犯）であったので、革命大衆

から批判される対象ではあった。しかし、「報喜似的」(嬉しい知らせのように)「格児屁了」(お陀仏になったぞ!)と知らせる者がいる事実は、哀切極まりない。

とはいえ、陳白塵がそうであったし³⁵⁾、張光年も数々の日記の存在がそれを証明しているように³⁶⁾、人は結局のところ、過去から離れられないのであろう。過去とは自らの生であったのだから。

他の言葉で換言すれば、文革という大きな外から加わった圧力の中で、如何に自由に生を続けたかという被害者の矜持が、そこにはあるのであろう³⁷⁾。

いついかなる時代でも、生命の強さは、我々を感動させる。過去にかけた生命は決してバカにできるものではないはずだ。

注

1) 1981年6月27日に中国共産党第11期中央委員会第6回全体会議は「建国以来の党の若干の歴史問題に関する決議」を通過した。その中で、文化大革命は1966年5月から1976年10月までと定められた。1966年8月8日には、党の8期11中全会で「プロレタリア文化大革命に関する決定」が通過した。文化大革命の目的は、「資本主義の道を歩む実権派を打ち負かし、ブルジョア階級の反動学術“権威”を批判し、ブルジョア階級と一切の搾取階級のイデオロギーを批判し、教育を改革し、文芸を改革し、一切の社会主義の経済基礎に不適切な上部構造を改革するのである」と言っていた。

文革については、たくさんの本が出ているが、高舉・嚴家祺『“文化大革命”十年史』(天津人民出版社、86年9月)が最も基本的な読み物であろう。

なお、サイトとして、溝口喜郎氏の「文革期文学研究」<http://www.goukou.com/>がある。

2) 天児・石原等編『岩波 現代中国事典』(岩波書店、1999年5月)を参照した。

3) 『長江文芸』1989年6月号から8月号まで、3回に分けて掲載された。1988年に張光年が故郷湖北の老河口市に戻った時のことを日記風に記したもの。

なお、上海遠東出版社から『向陽日記』(1997年9月)や『江漢日記』

(2004年5月)が出ている。また、「江漢日記」は『張光年文集 第4巻』(人民文学出版社, 2002年5月)に収められている。

また、咸寧の五七幹部学校について、張光年は「自嘲」(賀黎・楊健編『無罪流放——66位知識分子五七幹校告白』光明日報出版社, 1998年9月所収)という題で口述している。これはほぼ、上述の「江漢日記」と同じである。

4)『長江文芸』1989年第6月号28～29頁。

5)日本語訳として出ているものに、楊絳著・中島みどり訳『幹校六記——文化大革命下の知識人』(みすず書房, 1985年2月)と、陳白塵著・中島咲子訳『雲夢沢の思い出——文革下の中国知識人』(凱風社, 1991年5月)がある。

楊絳の原本『幹校六記』は、中島みどり氏の解説によれば香港から出たらしいが、今は『楊絳文集 第2巻』(人民文学出版社, 2004年5月)に収められている。

陳白塵の方は『雲夢断憶』という。これは生活・読書・新知三聯書店から1984年1月に出版された。133頁ほどの本である。

6)張光年のことは、たくさんの文学辞典に載っているが、ここでは主として、劉可興「光未然生平与文学活動年表」(『張光年文集 第4巻』人民文学出版社, 2002年5月所収)と、「張光年辞世」(『文芸報』2002年1月31日, 第1面)及び「著名詩人張光年在京辞世」(『文学報』1270期, 2002年1月31日, 第1面と第2面)に従っている。

張光年が「黒い線の仲間」になったことで、家宅捜査を2度受けた。父親はそのショックにより、脳血栓の発作を起こして死んでいる。弟・文華は沙洋の農場に労働改造にやられ、上の妹・張蓬、その下の妹・藍光とも「文芸の黒い線」の一味にされた。一番下の妹・張惠芳は、周揚の「黒い線」の一味とされて自殺した。張光年は、1975年6月「專案組」が解散したことにより、党籍が回復されたが、「反革命修正主義の文芸路線を推し進めた」という罪名は残っていた。1981年中央組織部は、徹底的に彼の名誉回復をした。1975年10月には、張光年は国家出版局の顧問となった。

なお、張光年は1965年4月に老舎を団長とする代表団で日本に来たことがある。私はまだ学生であったが、彼の出席する座談会に参加したことがあった。張光年は静かな人であったが、心底からの理論家という感じで凄みがあった。ここで、私が張光年をわざわざ出したのは、私なりのレクイエムのつもりである。

7) この間のことは、注3の「江漢日記」(『長江文芸』1989年6月号所収)に従った。

なお、幹部学校に下放することは、辛い厭なことではなく、実は嬉しい良いことであったことを王炳根氏が教授してくれた。王炳根著・拙訳「文革中の謝冰心」(『関西大学 文学論集』第55巻第4号所収)117頁。

8) 天児・石原等編『岩波 現代中国事典』(岩波書店, 1999年5月)を参照した。

なお、賀黎・楊健編『無罪流放——66位知識分子五七幹校告白』(光明日報出版社, 1998年9月)の「前言」にやや詳しい説明がある。また、『向陽情結——文化名人与咸寧』(人民文学出版社, 上1997年, 下2001年)という本があるようだが、未見である。

9) 楊絳著・中島みどり訳『幹校六記』(みすず書房, 1985年2月)。この幹部学校は何度か移転を繰り返している。息県に移ったこともある。

10) このことについては、拙著「文化大革命と文学者」(竹内実編『文学芸術の新潮流』岩波講座 現代講座第5巻, 1990年1月所収)を参照されたい。

なお、黄宗英「但願長睡不願醒」(賀黎・楊健編『無罪流放——66位知識分子五七幹校告白』光明日報出版社, 1998年9月所収)でも触れられている。

11) 奉賢の幹部学校に関しては、私は、当時上海にいた関西大学大学院生の水野善寛君に奉賢に行って写真を撮ってくれるように要請した。彼はそれを実行してくれ、写真を撮って来てくれたが、一部の建物以外それらしいものは何も残っていなかった。

私は、ここに載せた「江漢日記」などで後で知ったのだが、立ち去る時は、自分たちが使った建物も田畑さえも、綺麗になくしてしまうのであった。幾つかのまだ使えるものを土地の人が要請して、許可が下りれば(それも少ないようである)残すようであるが、殆ど始末してしまう。こういう考えに驚いたものである。残っていないのは、単なる年月の経過によるのではなかった。

12) 王西彦「焚心煮骨的日子」(賀黎・楊健編『無罪流放——66位知識分子五七幹校告白』光明日報出版社, 1998年9月所収)にも触れられている。

13) 賀黎・楊健「前言」(賀黎・楊健編『無罪流放——66位知識分子五七幹校告白』光明日報出版社, 1998年9月所収)

14) 人民出版社の下放については、楊静遠『咸寧幹校一千天』(長江文芸出版社, 2000年1月)があり、幹部学校の生活が詳細にわかる。

楊静遠は、1923年2月湖南省長沙に生まれた。父は有名な経済学者・楊瑞

- 六、母は作家で商務印書館に勤めた袁昌英である。楊静遠は、1945年に武漢大学を卒業すると、アメリカのミシガン大学に留学し、修士号を取った。帰国後、武漢大学外文系の講師になった後、人民出版社に配属された。中国社会科学院外国文学研究所の編輯、編輯審定者、中国訳者協会理事などを歴任。翻訳に『ブロンテ姉妹全集』10巻や『ピーターパン』などがある。
- 15) 1967年5月17日に公表された毛沢東の「516通知」に基づき、「中央文革小組の設置、党・政府・軍と文化界の“ブルジョア階級の代表的人物”や“フルシチョフのような人物”の批判・更迭」を要求するグループ。江青が「プロレタリア司令部、人民解放軍、革命委員会を批判した者」を「516分子」と定義したため、全国で数百万人の幹部や大衆が迫害されたという。以上、天兒・石原等編『岩波 現代中国事典』（岩波書店、1999年5月）を参照した。
- 16) 同注4、28頁。
- 17) 1974年12月に、残りの審査が終わっていない者や仕事の分配がまだの者を天津静海団泊窪五七幹部学校に入れた。「団泊窪的秋天」を書いた詩人の郭小川はここで亡くなった。「四人組」が逮捕される1ヶ月前のことであった。
- 18) 同注4、28頁。
- 19) 黄慶雲『我的文化大革命』（OXFORD、2006年）に拠れば、「我々の広東作協について言えば、当時は作家、運転手、雑務係の人を入れても全部で39人に過ぎなかった。このうち、牛鬼蛇神にされたのは19人（みな作家である）で、1人が自殺し、6人が別のリストに載せられた。造反派になって隊を間違えたのが4人いた。残りの者で革命大衆と言われた者はたった9人にすぎなかった」（24頁）と言っている。これは、広東の例であるが、牛鬼蛇神にされた作家が率として如何に多く、革命大衆というものがどういう人であるか、わかると言えよう。
- 20) このことで有名なのは、俞平伯である。文学研究所の研究員で紅樓夢の研究で名高い俞平伯は1969年11月15日に妻を伴い、河南省羅山の中国社会科学院の五七幹部学校に出かけた。時に69歳の最高齢であった。
 以上は、何西来「往事如煙」（賀黎・楊健編『無罪流放——66位知識分子五七幹校告白』光明日報出版社、1998年9月所収）による。
- 21) 陳白塵著・中島咲子訳『雲夢沢の思い出——文革下の中国知識人』（凱風社、1991年5月）23～25頁。
- 22) これについては、注5、で挙げた楊絳著・中島みどり訳『幹校六記——文化大革命下の知識人』の、中島みどり氏の「訳者あとがき」が参考になる。
- 23) 同注21、の41頁。

24) 拙著「文学者の死について」(『中国“新时期文学”論考——思想解放の作家群』関西大学出版部、1995年9月所収)を参照されたい。

なお、侯金鏡の急死については、とりわけ衝撃が強かったせいもあって、多くの文章で触れている。代表的なものに、張光年の『侯金鏡文芸評論選集』(人民文学出版社、1979年5月)の「序」がある。

25) この言葉は、『晋書・周顛伝』にある王導の言葉である。周顛が嘗て王導を助けてやったのを知らなかった王導が、周顛のために命乞いしなかったので、周顛が殺された。後で、周顛の恩を知った時に、王導が言った言葉。転じて「伯仁」と言えば「亡友」のこととなった。

26) 陳白塵『牛棚日記1966-1972』(生活・読書・新知三聯書店、1995年5月)の1971年8月8日の日記、216頁。

27) 注5、の陳白塵のところを参照されたい。

ト仲康「陳白塵小伝」および「陳白塵生平紀略」,「自伝」(いずれも、ト仲康編『陳白塵專集』江蘇人民出版社、1983年1月、中国当代文学研究資料、所収)によれば、陳白塵は1903年3月に江蘇清河県に生まれた。1994年5月28日に逝去した。

28) 張光年自身は「懐念老友陳白塵——『牛棚日記』読後感」(『張光年文集 第4巻』(人民文学出版社、2002年5月所収)154頁で、自分の名前は63回挙げられていると言う。これは、張光年は自分の名前が出てくるたびに数えたのであろうが、私の数え方が、同じ日に何度も出てきても、その日1回として数えたこととの違いである。

29) この間のことは、塗光群「中国作協“文革”親歴記(下)」(『中国三代作家紀実』(中国文聯出版公司、1995年6月、所収)に詳しい。

30) 肉体労働といっても、実際にはトイレ掃除であった。トイレは当時、他所からも人が大勢やって来て、しかも汚い使い方をするので、汚れた上に直ぐ詰った。

たとえば、謝冰心は毎日の労働として、文聯ビルの4階の2つの女子トイレ掃除をしたが、弱音を吐かずにモクモクと掃除をしたという。上述の注29、の392頁に拠る。

31) 同注26、の陳虹の「后記」、231頁。

32) 同注26、211頁。

33) 侯金鏡夫人。1922年の生まれ。中国作家協会会員。『人民文学』編集部主任。北京電影製片廠編導室主任。話劇「妯娌倆」や短篇小説「朝着太陽出来的那边走」など。咸寧の五七幹部学校にいた時は、侯金鏡が「現行反革命」

とされていたので、一緒に住むことも、仕事をすることも出来なかった。

- 34) 胡海珠は次のように言っている。「我很害怕回憶湖北咸寧文化部幹校那一段生活，也不願意回憶起1971年8月7日晚，侯金鏡同志突發腦溢血，8日凌晨逝世時那一幕悲慘的情景。」（胡海珠「追思幹校中的金鏡」。日月星博客。）

これらの文章は、次のサイトに拠った。

<http://ryx.fyz.cn/blog/ryx/index.aspx?blogid=46400>。

なお、「格兒屁」は、北京方言で「格兒屁着涼」ともいい、「不恭敬而調侃」のニュアンスがあるとのことである。張麗華氏と巴璽維氏の教示を受けた。記して感謝の意を表す。

- 35) 陳白塵は「前言」（『牛棚日記 1966-1972』生活・読書・新知三聯書店，1995年5月，所収）で、日記を整理したら、合計10余冊になったと言う。
- 36) 張光年には、「江漢日記」や「江海日記」「向陽日記」など6種ほどの日記がある。ただし、1970年の初めに咸寧の五七幹部学校に行ってから書き始めた。それ以前の隔離審査の時期には書くことが出来なかったと言っている。張光年「生命史上最荒謬的一頁——『向陽日記』引言」（『張光年文集 第4卷』人民文学出版社，2002年5月所収）。
- 37) 注5，に挙げた，楊絳著・中島みどり訳『幹校六記——文化大革命下の知識人』（みすず書房，1985年2月）と，陳白塵著・中島咲子訳『雲夢沢の思い出——文革下の中国知識人』（凱風社，1991年5月）は，特にその傾向が強い。
- その他，韋君宜『思痛錄』（北京十月文芸出版社，1998年7月）や，黃慶雲『我的文化大革命』（OXFORD，2006年）などでも，理不尽な圧迫への憤りが書かれてあるものの，やはり日記をつけ，自らの生命の証を残している。